

報道関係各位

社団法人日本能率協会  
 経営研究所

## シナプスな考察 Vol.5

経営研究所のマネジメントに関する調査・研究をもとに、研究員の考察・意見をお届けします

### 気づくために「学ぶ」

人材育成の世界では「気づき」という言葉が頻繁に使われます。人が自分自身や自分の組織をより良くするためには、気づきが必要といわれています。問題点に気づかなければ、対処のしようがないからです。しかし、気づかない人に“気づけ”というのは無理があるとも感じられます。気づきとはどのように促していくものなのかについて考察します。

#### 1. 気づきの構造

気づきはどこから生まれるのだろうか。気づきの構造は【下図】のようになっている。円の中が知っていること、円の外が知らないことを表している。したがって「学ぶ」ことは円を大きくすることを意味し、円周が未知との接点（知らないことの自覚）を意味する。つまり、この円周の長さが気づきを生む。

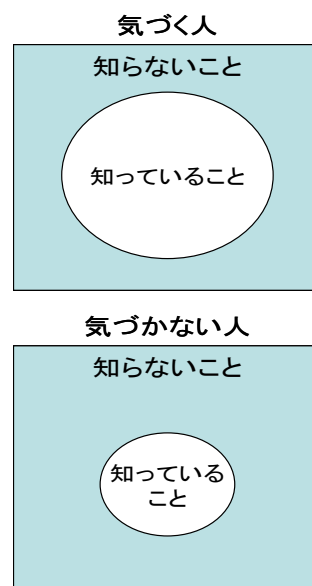
たくさんの“知識”がある人は円が大きく、円周も長くなる。したがって自分はまだまだ“知らない”という自覚があり、新たな気づきを生みやすい。一方で、“知識”の少ない人にとっては、円は小さく円周も短いため、未知との接点が少ない。したがって自分が“知らない”という自覚に欠け、気づき生まれにくい。多くの知識がある人ほど「自分はまだまだ知らないことだらけだ」と感じ、少ない知識しかない人ほど「私は多くのことを知っている」と感じることになる。

ここでは“知識”は入れるもの、“知恵”は出すものとして定義している。知識があるだけでは成果に繋がらない。自身が考え、“知恵”を出し、行動することで成果に繋がるものである。ただ、その源泉は気づきにある。知ることによって、知らないことが増え、自然と知りたい欲求が生まれる。気づきは「学ぶ」ことから生まれてくるのである。

#### 2. 気づきは「学ぶ」ことから

気づくことができる人は何からでも気づく可能性が高い。極端な話、犬の尻尾からでも気づく人は気づく。逆に気づかない人は永遠に気づかない。気づきとはそういうものである。常に謙虚に学ぶ姿勢があるから、気づき生まれるのである。

気づきを促すには、学ぶ機会を付与することが重要であろう。学ぶという言葉の語源が「真似る」という説があるように、まずは理屈抜きで真似て、学ぶ。そこから気づき生まれ、自問自答し、自分なりの意見や考えが醸成され、新たな知恵が生まれる。守破離という言葉はまさにその通りだろう。



以上

【本件に関するお問い合わせ先】社団法人 日本能率協会 経営研究所（執筆：山崎賢司）  
 〒105-8522 東京都港区芝公園 3-1-22 TEL：03-3434-6270 / Email：kadai@jma.or.jp

※本稿における誤りなどはすべて筆者個人に属します。

※取材のお問い合わせは、広報グループ（担当：亀山／TEL：03-3434-8620）へお願いいたします。